

研究主題「歴史学習における思考力の育成」
- 「論理カルタ」を活用した指導を通して -

小城市立砥川小学校 教諭 内田 明

1 主題設定の理由

21世紀は「知識基盤社会」「グローバル化」などと言われ、国際競争が加速する一方、異文化との共存や国際協力の必要性が増大してきている。このような状況の中、我が国の国土や歴史に対する理解と愛情をもち、身に付けた知識や技能を活用しながら、課題を解決し、よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培うことがますます重要になっている。それに伴い教育基本法や学校教育法も改正され、中央教育審議会答申を基に、学習指導要領が改訂された。

平成20年1月の中央教育審議会答申では、小学校社会科における改善の具体的事項について、「...各種の資料から必要な情報を集めて読み取ったりしたことを的確に記録し、比較・関連付け・総合しながら再構成する学習や考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習の充実を図る。」⁽¹⁾と示している。児童に、社会的事象に関する基礎的・基本的な知識、概念や技能を活用する力を身に付けさせるためには、知識を構造化し構成する能力の育成が不可欠である。そして、児童が自分の考えをもち言語で表現する、つまり、思考力を高めさせることが重要になってくる。これは、一市民・日本人としてよりよい社会の形成に参画する資質や能力を培い、公民的資質の基礎を養う上での重要な基盤となると考える。

しかし、小学校6年生の現状の社会科の歴史学習においては、教科書の資料や文章を基にして知識を獲得させることに重点を置いた授業が主となり、思考力を高めさせる授業が十分行われているとは言えない。したがって、児童は獲得した知識が断片的で実感が伴わず、知識を活用することが得意ではないと考えられる。こうした現状では、例えば歴史上の人物が当時の人々の願いを実現するために様々な工夫をして課題を解決し、国家社会の発展に大きな働きをしてきたことを理解するには不十分であろう。ひいては、歴史に対する理解と愛情をもち、日本人としての自己を確立することには至らないであろう。

本研究を行った学級の児童(平成22年度6年松組28名)に事前アンケートを行ったところ、社会科が好きだと答えた児童は10名であり、社会科の学習に対する関心は高くない。また、社会科の学習について、板書を書き写し、用語を覚えることが重要だと考えている児童が24名ととても多かった。さらに、自分の考えをまとめるのが好きだと答えた児童は2名であった。授業の様子から見ても、人物名や出来事、建造物の名前などの用語を断片的に覚えようとするだけで、歴史上の人物がなぜそのようなことを行ったのか、この結果世の中がどうなったのか、当時の人々はどう感じていたのかなど、関連付けて考え表現することができておらず、思考力が身に付いているとは言い難い。

そこで、児童に歴史的事象について関心をもたせ、思考の基盤とさせるために、インターネット上の動画クリップ視聴による疑似体験活動をさせる。そして、「論理カルタ」を記入させることによって、事象について知識を整理しながら論理的に思考し構造化する力を育成する。「論理カルタ」とは、フィンランドで盛んに実践されている「カルタ」と呼ばれる学習法に、より思考力を高めるような改善を加え開発した学習法である。さらに、考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合わせることによりお互いの考えを深めさせていくために、単元の終末に論理カルタを基にした討論活動を行わせる。

これらのことにより、歴史的事象への関心をもたせ、思考力を高めさせることができると考え、本研究主題を設定した。

2 研究の目標

小学校第6学年の歴史学習において、インターネット上の動画クリップ視聴による疑似体験、「論理カルタ」を活用した討論活動を行わせることを通して、歴史的事象について関心をもたせ、思考力を高めさせるための指導方法の在り方を追究する。

3 研究の仮説

動画クリップの視聴による疑似体験をさせることで歴史的事象について関心をもたせ、歴史上の様々な政策が行われた理由を明らかにするための「論理カルタ」にまとめさせ、「論理カルタ」を活用した討論活動をさせることで、思考力を高めさせることができるであろう。

4 研究の内容と方法

(1) 研究の内容

ア 体験活動、表現活動についての理論研究

イ 「論理カルタ」の開発

ウ 動画クリップの視聴、「論理カルタ」の記入、「論理カルタ」を活用した討論活動を取り入れた授業実践

エ ノートや「論理カルタ」、ワークシート、意識調査の分析による効果の検証

(2) 研究の方法

ア 体験活動、表現活動について、文献や資料を基に理論研究を行う。

イ 知識を整理しながら思考力を養うことができるような「論理カルタ」を開発する。

ウ 仮説に基づいて、所属校の6年生の学級で授業実践と意識調査を行う。

エ ノートや「論理カルタ」、ワークシート、意識調査を基に仮説の有効性を考察し、検証を行う。

5 研究の実際

(1) 理論研究

ア 体験活動(疑似体験)の意義について

平成20年1月の中央教育審議会答申では、体験活動の意義について「社会性や豊かな人間性、基礎的な体力や心身の健康、論理的思考力の基礎を形成する」⁽²⁾ことにあると述べている。つまり、体験的な活動はその後の思考活動の基盤となるものである。

しかし、歴史の学習は過去を対象としているため、体験することは基本的に不可能である。となると、資料の効果的な活用による疑似体験をさせることが重要となってくる。

教科書や資料集の写真や絵資料の読み取りを基に当時の様子を想像させ考えさせるという方法が一般的であるが、より実感を伴った疑似体験をさせるという意味では、動画資料の活用が非常に有効ではないかと考える。その中でも、NHK学校放送オンライン上にある動画クリップは、音声による解説と映像を交えて分かりやすく作られており、より質の高い疑似体験をさせることが可能となる。

動画クリップを活用することで、歴史的事象により高い関心をもたせ、その後の思考活動をより豊かなものにすることができると思う。

イ 表現活動(討論活動)の意義について

新学習指導要領では、全ての学年に「調べたことや考えたことを表現する力」を育てることが新しく掲げられている。

片上宗二は「調べたことに加えて考えたことを表現するという行為は、子どもが自らの追究の

過程を言語化し、客観化する。つまりは、子どもが自分の頭の中の活動を外部化することだといっ
てよい……そして他者に共有されなければ、意見の交換や議論を実り豊かに展開することは難しい。
社会科は、お互いの考えをぶつけ合い、協働思考を介して学びを深めていくことを基本とする。」⁽³⁾
と述べている。

北俊夫は表現活動について、「表現する活動は調べる活動や思考する活動と一体になって展開さ
れる。表現力は、表現する内容(調べたことや考えたこと)が明確になって発揮され、それに基づく
発表や報告や討論、論述や作品づくりなどの表現活動によって育成される」⁽⁴⁾と述べている。

両者の論述から、思考力を高めることと表現活動とは密接な関係があると言える。

実りある表現活動を行わせるためには、調べたことや考えたことを明確に構造化・外部化する手
立てが必要となってくる。この手立てとして「論理カルタ」の活用が考えられる。これに沿って学
習し自分の考えを他者と共有化すること、この一方法としての討論活動を取り入れることで、思考
力を高めさせることができると考える。

(2) 「論理カルタ」の開発

「カルタ」とは、フィンランドで盛んに実践されている学習法で、中心にキー
ワードを書いて周りに放射線状に言葉を書き、思考を整理していく方法である。

フィンランド式「カルタ」の中には、
文章を「5W1H」の形でマップ式に
まとめ、知識と思考力を養う「論理的
なカルタ」と呼ばれるものがある。「5
W1H」とは、「いつ(時間)」「どこで(場
所)」「誰が(人物)」「何を(対象・物事)」「
なぜ(理由)」「どのように(方法・様
子)」の6つの内容を意味している。フ
ィンランドではこの6つをマップ化し、物事を論理的にとらえる学習法が取り入れられている。図1

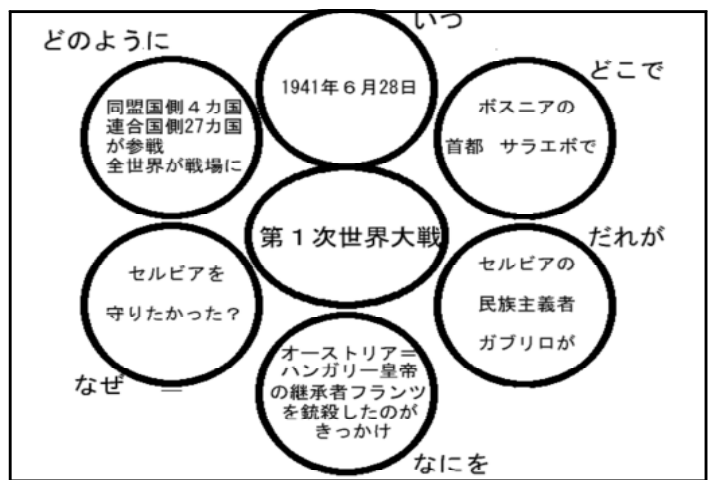


図1 「論理的なカルタ」

は、第一次世界大戦について論理的にまとめたカルタである。

「論理的なカルタ」を、より
思考力を高めさせることに重点
を置いたものにできないかと考
え、図2のような形のものを開
発した。これを「論理カルタ」
と呼ぶことにする。

思考力を高めさせるために、
まず、「なぜ(理由)」の記述欄を
大きくした。なぜなら、歴史的
行為がなぜ行われたのか、その
理由については教科書や資料集
にもあまり記述がないことが多
く、最も思考を要し、思考力を
高めさせることにつながるから
である。

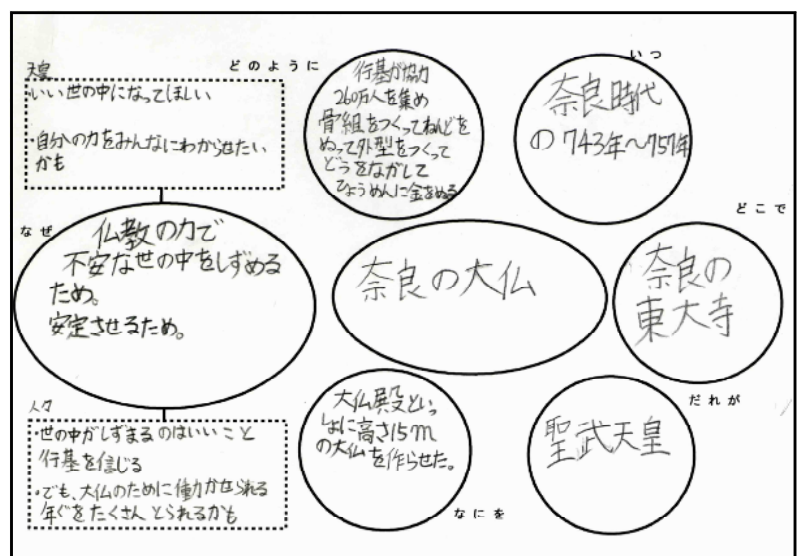


図2 開発した「論理カルタ」

次に、「なぜ(理由)」の欄の上下にも記述をさせ、歴史上の人物が行ったことについて複数の立場から考えさせたり、人物の政策のメリットやデメリットについて考えさせたりするようにした。なぜなら、例えば為政者側と各地の豪族や大名や民衆側の立場というように複数の立場で考えさせることで、より深く思考させることができるのではないかと考えたからである。

この「論理カルタ」を、1学期は表1の計画で児童に記入させることとした。最初は何を書いてよいのかが分からなかったり、記述や資料を見付けられなかったりする児童もあり、机間巡視をしながら支援を行った。特に、「なぜ(理由)」の欄は、資料で調べただけでは分からず自分なりの思考を要するため、記入することができない児童もいた。「動画クリップを再度見せてほしい。」と要望する児童が出てきて、視聴させ考え直す機会を与えた。

また、自主的に図書室で調べてきて「論理カルタ」を書き直している児童もいた。このような経緯を経て、回を重ねるごとに自分なりの考えを書き、自力で「論理カルタ」を構成することができる児童が増えていった。

表1 1学期のカルタ学習計画

	時代	キーワード
1	飛鳥	冠位十二階
2	奈良	奈良の大仏
3	奈良・平安	遣唐使
4	鎌倉	ご恩と奉公
5	室町	室町時代の農民の暮らし
6	安土桃山	楽市・楽座
7	安土桃山	キリスト教の保護
8	安土桃山	検地
9	安土桃山	刀狩り
10	江戸	江戸城改修

(3) 授業実践計画(2010年7月実施 小城市立砥川小学校6年松組 児童数28名)

ア 単元名

「戦国の世は、どう統一されたの」(日本文教出版)

イ 単元の目標

戦国の世の中について関心をもち、天下統一の足がかりを作った織田信長、天下統一を成し遂げた豊臣秀吉、安定した世の中の基礎を築いた徳川家康について調べ、3人の武将がとった政策の意義をとらえ、戦国の世が統一されていったことを理解する。

ウ 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	観察・資料活用・表現	知識・理解
戦国の世を統一した3人の武将の働きについて関心をもち、資料を活用しながら意欲的に調べ、考えながら追求しようとしている。	3人の武将の政策の意義について、為政者や民衆の立場から多面的に考え「論理カルタ」に記入し、討論をすることで自分の考えを深め、意思決定をすることができる。	資料を活用し、3人の武将の天下統一について調べ、必要な情報を読み取り、ノートや「論理カルタ」にまとめることができる。	戦国の世の統一は、信長が足がかりを作り、秀吉が成し遂げ、家康が安定した世の中の基盤を築いたことを理解することができる。

エ 指導計画(全12時間)

課程	主な学習活動	教師の指導・支援	時配
つかむ	1 長篠の戦いでの信長・秀吉・家康連合軍と武田軍の戦いの様子について話し合う。	長篠の戦いの合戦図から、信長・秀吉・家康連合軍と武田軍の戦い方の違いに気付かせ、鉄砲などを用いて新しい戦い方をした信長たちについて関心をもたせる。 動画クリップ「長篠の戦い」を視聴させ疑似体験をさせることで、関心を深めさせる。	1
学習問題1 信長、秀吉、家康は、どのようにして天下を統一していったのだろうか。			
調べる	2 3人の武将について、それぞれが天下統一のためにどんなことを行っていたかを調べる。	教科書や資料集で調べさせた後、よくわからなかったことなど新たな調べる観点をもたせ、3人の武将の政策について関連のある動画クリップを視聴させ疑似体験をさせることで、更に詳しく意欲的に調べさせる。	3

調べる	3 3人の武将の政策について、「論理カルタ」にまとめて発表し、話し合う。	<p>信長の政策は、鉄砲の活用、楽市・楽座や南蛮貿易、キリスト教の保護など、古いしきたりにとらわれず、新しい考えや進んだ文化を生かして付けようとする意図があったことについて考えさせる。</p> <p>秀吉の政策は、検地や刀狩りなど、世の中の仕組みを整え全国を支配統一しようとする意図があったことについて考えさせる。</p> <p>家康の政策は、関ヶ原の戦い、江戸城改修と江戸の街作り、幕府領の制定など、大名をおさえ天下を安定させようとする意図があったことについて考えさせる。</p> <p>必要に応じて動画クリップを再度視聴させ学習を振り返らせることで、3人の武将がなぜこのような政策をとったのかについて考える際の参考にさせる。</p>	3
-----	--------------------------------------	--	---

学習問題 2 3人の武将の中で、誰が一番すばらしいと思うか？

高める	<p>4 3人の武将それぞれが一番すばらしいという立場に立って、よいところと問題点を表に整理する。</p> <p>5 一人の武将を選びすばらしいと思う理由と、それに対する反論や質問を予想し、答え方を考える。</p> <p>6 「一番すばらしいと思う武将は誰か」というテーマで3人の武将について討論を行う。</p>	<p>3人の武将それぞれが天下統一のために重要な役割を果たしたことを理解した上で討論に臨ませるために、「論理カルタ」などをもとに、それぞれの武将のよいところや問題点について考えさせ表にまとめさせる。</p> <p>焦点を絞った討論をさせるために、3人の武将をすばらしいと思う理由、反論、質問については、「論理カルタ」を基に考えさせるようにする。</p> <p>論点が明確な討論にするため、司会役を務め、主張や反論、質問の要点を黒板にまとめ討論の内容を整理しながら進行させる。</p>	1 2 1
見出す	7 討論を振り返り、最終的な自分の考えをまとめる。	前時を振り返り、討論の内容を整理した後、「(自分が選んだ武将名)について」という題で作文を書かせ、その武将の政策の意義をもとに最終的な意思決定をさせる。	1

(4) 授業の実際

ア 「つかむ」段階

長篠の戦いの合戦図をもとに、織田・徳川連合軍と武田軍の戦い方の違いを見つけさせた。合戦図を実物投影機とプロジェクタでスクリーンに投影し、どの部分に注目したのか児童にマーキングさせながら話し合いを進めた。児童は、武田軍はほとんどが騎馬隊であること、織田軍は騎馬隊を動きにくくするため川の後ろに陣取っていること、柵を立てて騎馬を遮っていること、鉄砲を用いていることに気付いた。マーキングをさせることで、児童は全員が資料のどの部分を見ればよいか分かり、児童個人の気づきを全体で共有化させることが容易にできた。

その後、NHK学校放送オンライン上の動画クリップ「長篠の戦い」を視聴させ、織田軍はポルトガルから伝わった鉄砲など新しい戦い方を取り入れて勝利したことを映像で確認させることで、織田軍の戦いについて実感を伴った理解を促し、関心をもたせることができた。そして、学習問題1を導き出させた。

イ 「調べる」段階

織田信長については、鉄砲の活用、楽市・楽座、南蛮貿易、キリスト教の保護を取りあげた。教科書や資料集を基に調べさせ、分からなかったことやもっと詳しく調べたいことなど新たな調

べる観点をもたせた上で、NHK学校放送オンライン上の動画クリップ「火縄銃」「楽市楽座」「南蛮貿易」「キリスト教宣教師と信長」を視聴させて調べたことを確認させたり付け加えをさせたりした。このことにより、織田信長は古いしきたりにとらわれず、新しい考えや進んだ文化を生かして力をつけようとする意図があったことについて気付かせるようにした。

豊臣秀吉については、朝廷の力を利用し関白となったことや、検地、刀狩、朝鮮出兵を取りあげた。その政策について調べさせ、動画クリップで確認させることで、豊臣秀吉は世の中をうまく支配していく仕組みを整えることで天下統一を成し遂げたことに気付かせるようにした。

徳川家康については、関ヶ原の戦いにおける家康の智略、江戸城や江戸の町の整備、幕府領の制定を取りあげた。上記と同じように調べ学習をさせ、それらの政策は、大名を押さえ天下を安定させようとする意図があったことに気付かせるようにした。

3人の武将のこのことについて学習した後、「論理カルタ」を作成させた。3人の武将の政策について、「いつ(時間)」「どこで(場所)」「誰が(人物)」「何を(対象・物事)」「なぜ(理由)」「どのように(方法・様子)」なされたのかをまとめ、特に「なぜ(理由)」の部分については十分に時間をとり、理由に加えて複数の立場から考えさせるようにした。

さらに、4人グループで意見交換をさせ、グループの考えをまとめ発表させるようにした。友達のことを参考にしたものは赤字で書き加えさせた。

織田信長の政策については、楽市・楽座とキリスト教の保護を取りあげた。楽市・楽座についてA児は図3のように、なぜ信長が楽市・楽座を行ったのかの理由について、「商工業を発展させ町を栄えさせるため」と考えた。グループで話し合い、「人々の暮らしを豊かにするため」と付け加えている。当時の民衆の立場について、「いろいろなものを自由に売ったり買ったりすることができて生活がよくなるので、うれしい」と考え、信長の立場からは「人々が豊かになると年貢もふえるのでいい」と考え、グループでの話し合いから「国が豊かになる」と付け加えているのが分かる。

豊臣秀吉の政策については、検地、刀狩りを取りあげた。秀吉が刀狩りを行った理由についてB児は図4のように、「農民の一揆がおこらないように。争いがおこらないように」と考えた。農民の立場について、「年ぐがきびしくてもがまん」「ころされてしまう」と考え、「大仏を作る材料だとだまされてかわいそう」と付け加えている。武士の立場からは、「農民が言うことを聞くようになるので、いばれる」「一揆がおきなくなるので、しずめなくていい」と考え、

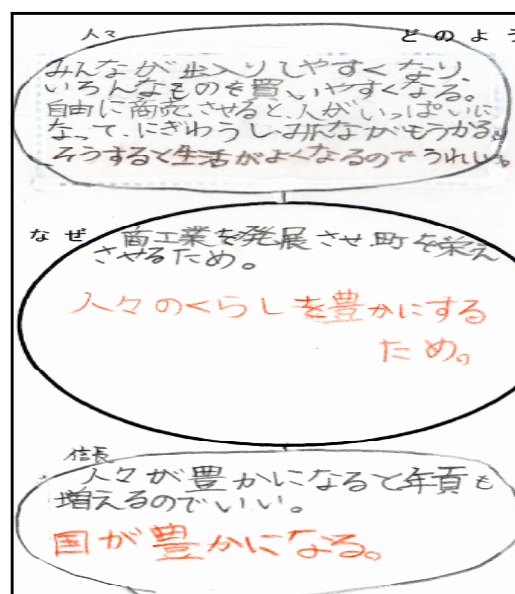


図3 A児のカルタの一部(楽市・楽座)

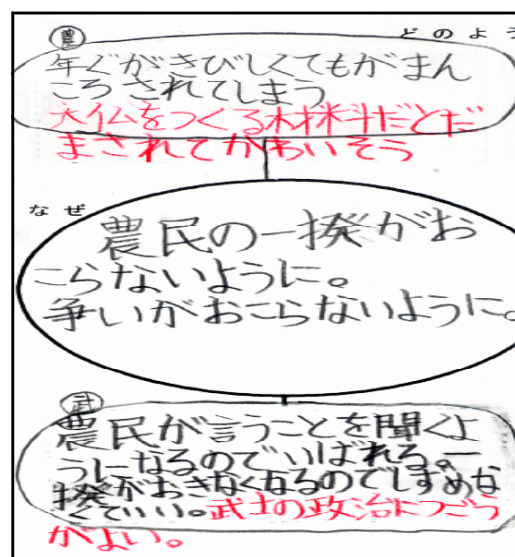
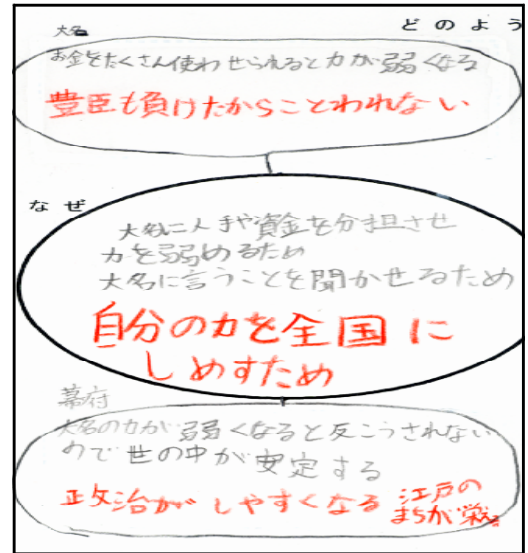


図4 B児のカルタの一部(刀狩)

「武士の政治に都合がよい」と付け加えている。

徳川家康の政策については、江戸城改修を取りあげた。改修を行った理由についてC児は図5のように、「大名に人手や資金を分担させ力を弱めるため」「大名に言うことを聞かせるため」と考え、「自分の力を全国にしめすため」と付け加えている。大名の立場からは、「お金をたくさん使わされると力が弱くなる」と考え、「豊臣も負けたから、強いので、ことわれない」と付け加えている。幕府の立場からは、「大名の力が弱くなると反こうされないので、世の中が安定する」と考え、「政治がしやすくなる」「江戸のまちが栄える」と付け加えている。



このように、論理カルタに知識を整理しながら、各武将の政策が行われた理由について考えさせ話し合わせることで、思考力を高めさせることができたのではないかと考えられる。

また、動画クリップについては、調べる前の段階で事象に関心をもたせるため、調べても分からなかったことについて考えさせるヒントとするため、考えたことが正しいのかを確認するためなど、目的に応じて使い分けた。安易に結論を与えないよう、あえて途中までしか見せない工夫もした。このことは、調べたり考えたりする意欲を効果的に高めることにつながったのではないかと考える。

ウ 「高める」段階

3人の武将それぞれが天下統一のために重要な役割を果たしたことを理解した上で討論に臨ませるために、論理カルタなどを基に、3人の武将それぞれが一番すばらしいという立場に立って、その武将のよいところと問題点を書かせた。なぜなら、討論活動をさせる目的は、どの武将が一番かを決めることではなく、3人の武将それぞれの働きや問題点を認識した上で友達の考えを聞き、自分の考えを吟味させ深めさせることにあるからである。

そして、自分が一番すばらしいと思う武将を1人選び、その理由を書かせた。その後、信長グループ、秀吉グループ、家康グループに分かれて他のグループからの反論を予想させ、反論への回答を考えさせた。

図6は、家康グループのワークシートである。左から、家康がすばらしいと思う理由、それに対する反論の予想、反論に対する回答である。どの

江戸城をつくる費用を大名にかたんさせて力を弱くし、争いのない世の中にしたから。	ふりやり大名にお金を出させて自分が住む戸を作らせるのは自分勝手じゃないか？	争いが無い平和の世の中にするのが人々にとって一番いいことだから。そのために大名の力を弱くしておくのは必要だ。たと思っ。べつに大名をこころすわけじゃないから。
---	---------------------------------------	--

図6 討論の準備ワークシート(家康グループ)

グループも論理カルタを見ながら話し合い、理由や反論や回答の根拠としている様子が見られた。

その後、上記の3グループに分かれて、各グループの代表3名が自分の意見を主張し、その他のグループから質問や反論を受け、答えるという形で行った。児童にとって討論は初めての体験だったので、質問された内容が分からなくなったり、適切な言葉で答えることが難しかったり、予想していなかった質問があつて戸惑ったりする場面もあった。

教師は司会を行い、それぞれのグループの主張や質問、反論の要点を板書して整理しながら、何について答えればよいのかなど必要に応じて支援をした。質問や反論の答え方についてはグループで相談する時間を与えた。また、必ずしも再反論するのではなく、相手の意見を受け入れてもよいということにした。

このような討論を行ったことは、多様な考えに数多く触れさせ、自分の考えを吟味させるよい機会となった。

エ 「見出す」段階

討論を振り返り、内容を整理した後、「 (自分が選んだ武将名)について」という題で作文を書かせ、その武将が行った政策を基に、最終的な自分の考えを自由にまとめさせ、意思決定を行わせた。自分が選んだ武将がすばらしいと思う理由(根拠)を明確に書くことと、討論の際に出た反論やそれに対する回答を参考にして書くことを指示した。

(5) 仮説の検証

ア 動画クリップを活用し、歴史的事象に関心をもたせることについて

単元の学習後に、児童を対象にアンケートを実施した。動画クリップを見るのが好きだと答えた児童は28名中27名(96%)、動画クリップは分かりやすいと感じた児童は28名中27名(96%)であった。学習後の児童の感想には、「文章や写真だけより、動画を見た方が昔の様子が分かりやすかった」「動画は頭に残るから役に立った」等の記述が見られた。

このことから、動画クリップの活用は歴史的事象に対して関心をもたせるのに有効であったと考えられる。

イ 「論理カルタ」を活用した討論をすることによる、思考力の高まりについて

「論理カルタ」の記述に武将の政策についての理由付けや複数の立場からの思考が見られたかについてと、討論後の意思決定に論理性や複数の立場から多面性のある思考が見られたかを分析することで、思考力を高めさせることができたかを検証することとする。

まず、児童が記入した「論理カルタ」の分析を行った。

取り上げた歴史的事象や政策について、「なぜ(理由)」の部分に妥当な理由を思考して記入することができた児童がどれ位いたのかを調べた。カルタを使った1回目の学習「冠位十二階」では28名中15名(54%)、2回目の学習「奈良の大仏」では28名中17名(61%)であったのが、9回目の学習「刀狩」では28名中25名(89%)、10回目「江戸城改修」では、28名中24名(86%)に増えた(図7)。

歴史的事象や政策について、「なぜ(理由)」の欄の上下に複数の立場で考えることができた児童がどれくらいいたのかを調べた。1回目の学習「冠位十二階」では28名中12名(43%)、2回目

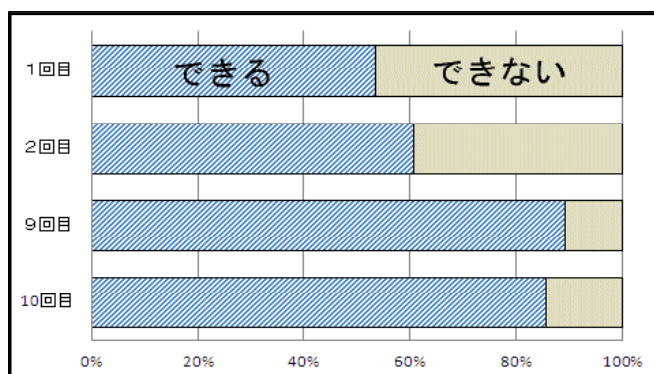


図7 理由の記入

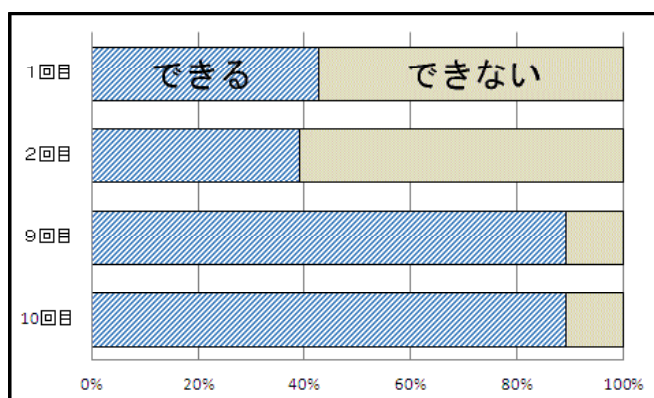


図8 複数の立場で考える

の学習「奈良の大仏」では28名中11名(39%)であったのが、9回目の学習「刀狩」、10回目「江戸城改修」ではともに28名中25名(89%)に増えた(前項図8)。このことから、「論理カルタ」の学習をさせ、回を重ねていくことで、思考力を高めさせることができていると言える。

次に、結論とその根拠の結び付きが明確であるかを「思考の論理性」、複数の立場からの思考ができるかを「思考の多面性」として、討論後の意思決定について分析を行った。表2はその児童別の分析表と評価の基準である。

表2 討論後の児童の意思決定と評価の基準

評価	児童																											
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
I 思考の論理性	B	C	A	A	A	B	A	B	A	A	A	A	A	A	A	B	A	A	A	B	A	B	A	A	A	B	A	A
II 思考の多面性	C	C	A	A	A	B	B	A	A	A	A	B	A	A	A	B	B	A	A	B	A	B	A	C	A	B	A	A

- A・・・結論とその根拠が明確に結び付いており、武将の政策の意義について十分に認識した正しい記述をしている。
- B・・・結論とその根拠が明確に結び付いており、武将の政策の意義について正しく記述している。
- C・・・根拠の記述が武将の政策を基にしておらず、不十分である。
- A・・・武将の政策や行為について、複数の立場から評価した記述が2つ以上ある。
- B・・・武将の政策や行為について、複数の立場から評価した記述がある。
- C・・・武将の政策や行為について、複数の立場から評価した記述がない。

表2の のように、討論後の作文に、最終的にどの武将が一番すばらしいか(結論)と、その理由(根拠)を明確に結び付けて正しく記述していた児童は28名中27名(A + B, 96%)であった。

表2の のように、武将の政策について複数の立場から評価した記述をしている児童は28名中25名(A + B, 89%)であった。

例として、どちらともA評価とした21児の作文を分析する。図9の討論後の作文を見ると、検地と刀狩について棒線 のように明確な根拠を示し、政策の意義についても「国の力の安定のため」「一揆を抑制し平和にするため」ととらえ、十分に認識していることが分かる。

また、刀狩と朝鮮出兵について波線 のように、為政者の立場だけでなく、「農民」や「大名」など複数の立場から思考し評価していることが分かる。

21児は刀狩の「論理カルタ」に、為政者の立場として「一揆が鎮まれば平和になり、政治がしやすくなる」、また、農民の立場として、「武士と農民の身分の差ができて、自分たちが武士より下になり、不満があっても何も言えなくなる」と複数の立場から記入しており、多面的な思考をすることができていた。また、討論の際は

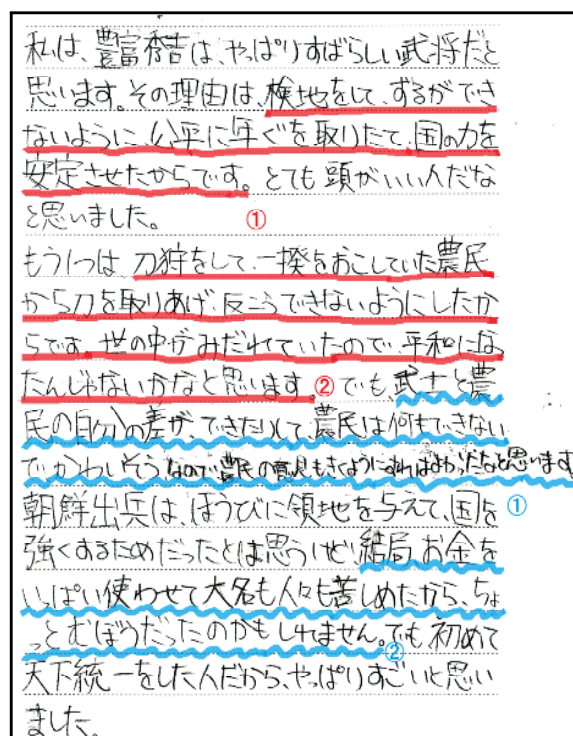


図9 討論後のD児(21児)の作文

刀狩りについて棒線 と同じ趣旨の主張をし、「農民がかわいそうなのではないか？」という反論に、「平和な世の中にする事のほうが大切だったと思う」と、論理性をもって回答していた。

そして、「武士の言うことは何でも聞かなければいけないのか？」と再度反論され、答えに詰まっていた。その結果、作文の中では波線にあるように、「農民の意見もきくようにすればよかった」と、多面性のある新しい考え方を得ている。このことから、論理カルタの学習と討論を経て思考が高まった結果の意思決定であると言える。

どちらともC評価とした2児について述べる。2児はもともと文章を書くことや思考することがとても苦手であった。2児(織田信長を選択)の作文には、信長の具体的な政策の意義に関する記述や多面的な評価が見られなかった。しかし、信長を支持する理由として、「鉄砲を使って戦がとても強かった」「新しいものを取り入れた」と記述しており、論理性については若干の高まりが見られた。今後は、政策の意義についてとらえられるよう個別に支援していきたい。

以上のことから、「論理カルタ」の学習と、それを活用した討論活動をさせたことで、思考力を高めさせることができたと考える。

5 研究の成果

- (1) 動画クリップを視聴させることは、より実感を伴った疑似体験となり、歴史的事象に対するイメージをふくらませた。この結果、歴史的事象に対する関心を高め、考えてみたいという意欲につながり、その後の思考活動の基盤となった。

インターネット上の動画クリップの視聴による疑似体験をさせることで、歴史的事象について関心をもたせることができた。

- (2) 「論理カルタ」を作成させ、カルタをもとに討論をさせることで、知識を構造化し構成する能力を育成しながら思考力を高めさせることができた。このことは、より質の高い判断に基づいた意思決定ができることにつながり、よりよい社会の形成に参画する資質や能力を培うことになる。これは、公民的資質の基礎を養う上での基盤となる。

6 今後の課題

討論活動では、学級全員で行う形態を取ったため、全ての児童に主張や反論・質問を行う機会を十分に与えることができたとは言えない。また、討論活動に慣れていなかったため、反論や質問の仕方が分からずに戸惑っている児童もいた。今後は、より少人数での討論など、討論の形態を工夫する必要がある。

また、討論する力を計画的に高めていくため、討論活動をどの単元で取り入れていくか、何をねらいとするかについて、年間指導計画の作成が必要である。

《引用文献》

- (1) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説』 平成20年 東洋館出版社
p. 4
- (2)(3)(4) 北 俊夫 片上 宗二編著 『小学校 新学習指導要領の展開』 2008年 明治図書
p.15,p.20,p.30

《参考文献》

- 小林 朝夫 『子どもの「頭のよさ」を引き出すフィンランド式教育法』
2008年 青春出版社
- 田中 博之 『フィンランド・メソッド超「読解力」』 2010年 経済界